

自分とももの関係性、 それこそが作品となる

ゲスト◎彫刻家

多和圭三氏

勉強ぎらいの落ちこぼれ

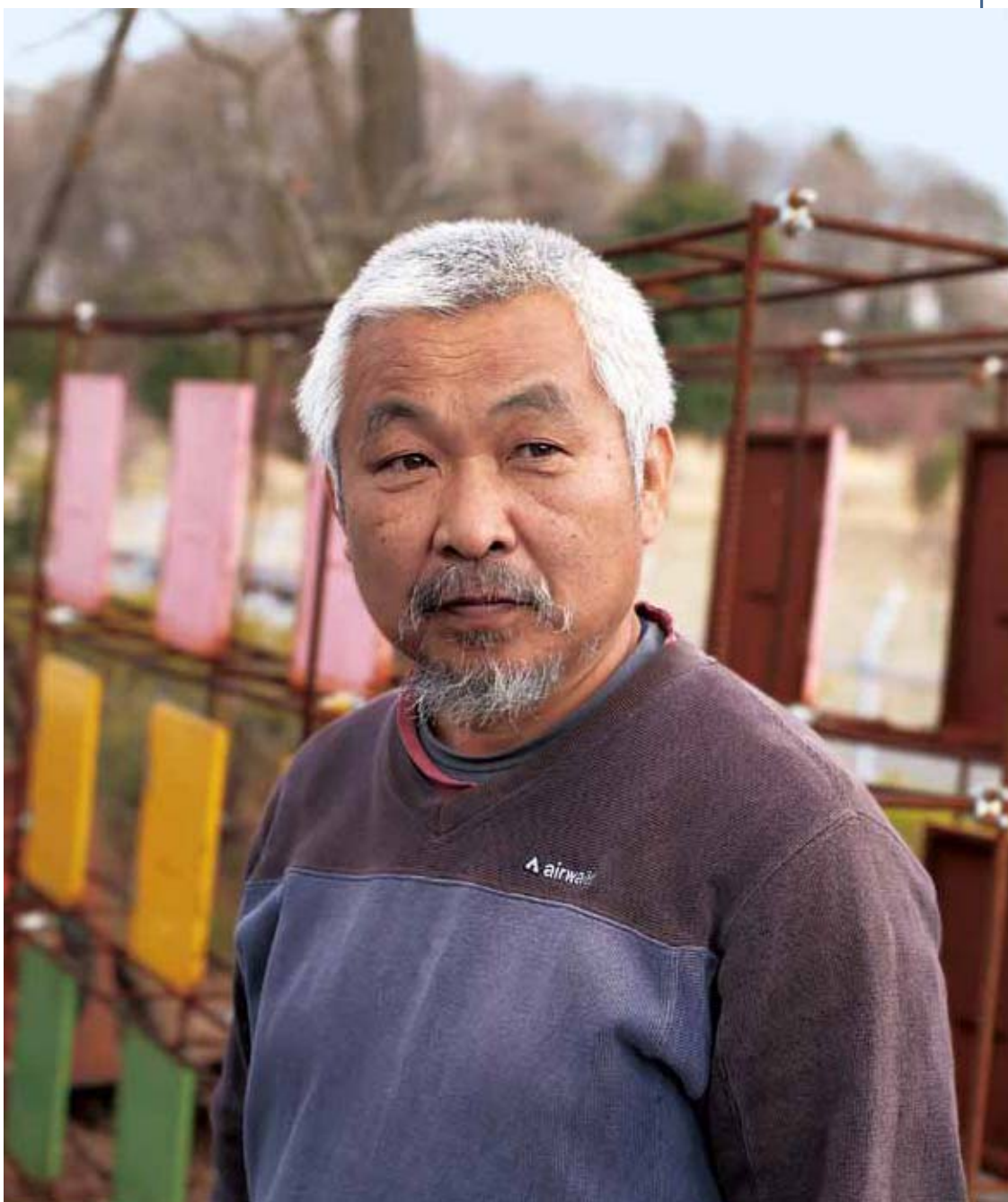
——彫刻家であり、多摩美術大学の先生もいらっしやいますが、美術の道に入られたきっかけを教えてくださいませんか。

勉強がきらいだったんです。でも、学校に行って何もしないことはこわいことなので、美術クラブに入れば、なんとなく時間がつぶせるかなと。私に通った高校は県内の進学校だったんですが、落ちこぼれて、クラブの時間が自分のなかで唯一手がたえのある時間……まあ、美術でうさばらしをしていたようなものです（笑）。

——もともと絵は得意だったのでしょうか。

うーん、小学生のとき学校で賞をもらったことが一度だけありますが、瀬戸内海の小さな島で、1学年が40名くらい。そんな中で褒められてもねえ。ウチはみかん農家で、両親は絵に興味を持ったことはあったのかなあ？朝から晩まで野良仕事をしてまして、自分はそんな大変なことはいやだなあ、高校を卒業したら家から逃げ出そうと思っていました。

高校で入った美術クラブは、美大を目指すことが入部の条件だったんです。それで「ぼくも美大に行きます」なんて口からでまかせ



プロフィール 1952年(昭和27年)、愛媛県大三島生まれ。彫刻家。日本大学芸術学部卒業後、同大学非常勤講師、武蔵野美術大学非常勤講師などを経て、現在、多摩美術大学教授。「鉄を叩く」という独自の彫刻スタイルを確立し、国内外から高い評価を得ている。個展・グループ展も多数。94年には旧・新日鉄本社ビルにおいて「第3回 STEEL ART 展」に出品。東京国立近代美術館にも作品が所蔵されている。95年公益信託タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞受賞。03年第33回中原悌二郎賞優秀賞受賞。07年文化庁買上優秀美術作品。



作品制作の様子 写真：山本朝

を言っ(笑)、最初にやったのが当時の美大の入試科目になっていた木炭デッサン。ピエラスの首像を描いたんですが、顧問の先生が厳しくて何度も描き直しになって1枚描くの3カ月もかかりました。

——最初は絵画ということですが、彫刻を始めたのは？

クラブの顧問の先生に、「おまえは絵はまるでダメだ、彫刻にしたらどうだ」と言われて始めたわけです。我ながらなんともいい加減。それで大学の彫刻科に進みました。

自分の居場所を探し、鉄と出会う

——作品に鉄を使われたのは、どんなきっかけがあったのですか。

最初に鉄を使ったのは大学2年のときです。その頃の私は学校に行っても石の上に寝っころがったり、近所の映画館に入り浸ったり、毎日がそんな感じ。とにかく自分が何をしたいのか、まったくわからない状態

でもんもんとしていました。そんなとき、ふと鉄筋などを曲げる油圧ベンダーの鉄製の受け部がひしゃげているのを見て、どうしてかわからないのですが、とても魅力を感じたんです。

また、私は社会というものがだんだん硬く、締まっていくような印象を持っていて、そこに自分の居場所はないと感じていました。でも、鉄は叩いた部分は硬くなるけれど、その周りは外に伸びていくでしょう？組織も叩かれた部分は密になるけれど、縁の部分には隙間ができる。今の社会に私の居場所はないけれど、そうやって生まれた隙間になら、私のような人間でも居場所が得られるんじゃないかと。なんだかそんなイメージが重なって、よし鉄を叩いてみよう！と思ったわけです。また、当時の美術界は、直接モノに触れる作品づくりを軽視する風潮がありました。だから逆に、自分は触れること、身体を使うことで作品づくりをしたいという気持ちも強かったですね。

——重そうなハンマーですが、何キロくらいありますか？

これは石屋さんが使うハンマーで8キロあります。いろいろ試して、これがいちばん叩く仕事に合っていたのです。柄は手づくりで、あえてしなる材質の木を使っています。叩いたときの衝撃を緩和してくれるし、折れにくい。最初の頃はそれがわからず硬くて真っ直ぐな木を柄にして叩いたら、手が腫れ上がりました(笑)。

——どこまで叩けば完成形になるのでしょうか。際限なく叩けそうですが……。

いや、ハンマーと鉄と自分の力、この3つがバランスするポイントがあるんです。それ以上叩くと鉄が裂けてしまう。目安はそこですね。最初の頃は裂けてしまったこともありましたけど。若い頃は早朝から、1日10時間くらい叩いていました。大学の構内で作品をつくっていたので、近くの下宿生がその音で目を覚ます(笑)。でも、夜はやりません。太陽が出てくる間だけ。太陽光と違い、ライトの光はどうしてもある一定の方向からになるので、一定の情報しか得られない。

——素材となる鉄にも、それぞれ個性があると思います。

鉄の塊を買ったら、まずそれをしばらく眺める。汚れを落としたり、さびを落としたり、溶断面の酸化膜をとったり。そういうことをしながら、少しずつ自分とものつながりをつくっていくんです。それで、例えば溶断した面の縦線がすごくきれいに見えたとか、鉄それぞれに特徴があるので、そこに自分が触発されて仕事が始まります。

——そうそう、私の使っている鉄はどれも新日鉄さんからなんです。昔一度だけお金がな

くて安い外国産を使ったんだけど、いくら叩いてもうまく締まらなかったなあ(笑)。

美術作品は、五感でつかむもの

——多和さんの作品づくりは、身体性が大きなテーマですね。

材料を叩きながらものをつくっていると、自分の身体の限界にぶち当たる。体がブレーキの役目をする、このことが大事だと感じますね。それから、1回叩くごとに目で見て鉄の状態を確認する。そういう自分とものとの関係性こそが作品なんだという思いがあります。

——最近鉄以外の素材でも作品づくりをされていますね。

この素材でやりたい、というのではなく、ふだん自分が考えているいろんなイメージがあつて、そこに合ったものならなんでも。例えば5月号の表紙用の作品は、上に乗っているのがまな板なんです。わが家で長いこと使つて、妻がもう捨てると言うので見たら中央部がへこんでいてすごく形が面白い。それで作品に取り入れてみたわけです。

——これから1年にわたって新日鉄広報誌の表紙を飾っていただくわけですが、それも含め、美術作品の楽しみ方についてアドバイスをいただけますか。

本当は生で見たいんですけどね。それは私の作品に限らず。例えば私の作品も、それが置かれる場や空間との関係性を考えて制作し、展示もします。だからぜひ作品を実際に見に行つて、五感で触れてほしい。写真とは違ったよさを実感できると思いますから。

——楽しみにしています。ありがとうございます。